



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第12号

2012 前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

第 18 回例会
2012 年 6 月 10 日(日)
衍芸館
プログラム

例会
15:00-17:00

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その 6

森 朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 久保春代 (Pf) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第 2 幕第 1 場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 2, Scène 1, Poème de M. Magare

～休憩～

【演奏】

平原あゆみ (Pf)

セヴラック：《即興曲第 2 番》

Déodat de Séverac : Impromptu No.2

舘野 泉 (Pf) 柴田 暦 (Vocal)

塩見允枝子：アステリスクの肖像

懇親会
17:00～

南仏セルダーニュ地方の教会建築と歴史（2） ●松本智勇	4
〈連載〉セヴラック随想（3） ●濱田滋郎	9
〈連載〉セヴラックと私 ●多田恭子	12
第17回例会の報告 ●鎌田和夫	14
第18回例会プログラム	表2

南仏セルダーニュ地方の教会建築と歴史（2）

第16回例会のお話より

松本智勇

第16回例会の松本智勇さんのお話を、2回に分けて紹介します。紙幅の関係で、使用された多数の美しい写真のごく一部しか掲載できないことを、ご了承ください。

ここに収録した写真や内容は松本さんのブログ <http://stundenbirne.jugem.jp/> で詳しくご覧になれます。

★大地の歌 農事詩

フォンフロワ修道院を修繕したギュスターヴ・ファイエは、ミストラルの『ミレイユ』の装画を作っています。その中に「これこそ、きみたち牧人と 農民たちの歌なのだから！」という一節があります。

この一節は、セヴラックの《ラングドックにて》の最初にも記されていますが、セヴラックにも右のような写真が残されています。



写真1 セヴラック

教会と生活の関わりを少しお話ししましょう。

「大地の歌 農事詩」というのは、ウェルギリウスの「農事詩」と同じ言葉ですが、「暦」と非常に関わっています。ローマ時代以前から「暦」は、いろんなものが作られていましたが、農事暦という暦が独立してありました。

10世紀になると1月や2月など、それぞれの「月」が擬人化されて写本などに描かれるようになります。そして、四季と月の擬人像とともに、その月にどんな農作業をやっているか、ということが描かれています。さらに12世紀くらいになると、これが神様の絵に変わっていきます。



写真2 ウェルギリウス著『農事詩』第3巻。

羊飼いと家畜の絵

サン・ピエール教会 オールネイ 12世紀

ラングドックではないのですが、オック語の圏内には写真3のような彫刻があります。一番外側に黄道十二宮（ゾティアック）が描かれ、12星座にいっしょに月々の労働や、キリスト教的な主題が彫られています。このような彫刻が出現するのがだいたい12世紀くらいになります。教会なのに、なぜ農業のさまざまな作業を絵にしたか、というと、



写真3 サン・ピエール教会 (オールネイ)



写真4 サン・クロワ教会 (ボルドー)

これは当時の神学者の言葉なのですが、「移り変わる季節や月々の労働を通じて、農民たちなどはキリストの教会でひじょうに信心深いほうに行く」と言いました。月々の労働をとおして神の世界を感じることができる、という考えだったようです。

写真4はボルドーのサン・クロワ教会。駅の近くなので見かけたことがあるかもしれません。堂内に18世紀くらいひじょうによいオルガンがあって、マリー・クレール・アランとかがここで演奏して、録音も出ています。この彫刻についてですが、ここも主題が違いますが、一番外側は黙示録の彫像たちです。いろんな楽器を持っています。その内側にやはり黄道十二宮と月々の労働の組み合わせがあります。

ブルゴーニュ地方のトゥルーニュという地にサン・フィリベール教会があって、ここは11世紀当時は非常に大きな修道院でした。2000何年かにかこの内陣周歩廊の地下から床のモザイクが発見されたのですが、ここにやはり蟹座(写真5)はとふたご座のあいだに、イウニュウスとあるので6月の労働を描いた絵があります。



写真5 サン・フィリベール教会の床の蟹座のモザイク

バルセロナの近くのジローナという街、カタルーニャ地方なのですが、こちらにひじょうに有名な刺繍布が残っていますが、このように月々の労働が描かれています。

こういったキリスト教の世界というのが12世紀くらいから表されていきます。



写真6 ジローナの刺繍布

獅子座と牡羊座

トゥールーズは、フランス革命の影響でこのようなものが壊れてしまっていて、ほとんど残っていません。写真7は、サン・セルナン教会の南の袖郎にあった彫刻で、現在オーギュスタン美術館にあります。ふたりの女性が獅子座と牡牛座をもっている彫刻です。今まで見た扉の彫刻というのは、彫刻ひとりひとりの高さというのは、だいたい50センチくらいなのですが、この彫刻はほとんど等身大で、もしこれが全部そろっていたら、相当なモニュメントだったと思います。

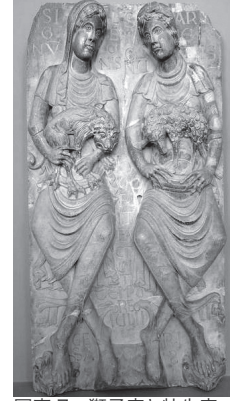


写真7 獅子座と牡牛座をもつ女性

セルダーニャ

比類なき地への讃歌

バルセロナの図書館のサイトに行ったら、セヴラックの自筆譜の一部が公開されていました(写真8)。

曲集のタイトルである「セルダーニャ地方」は、今はどちらかというと景色のよい田舎という印象だと思うのですが、ここがヨーロッパの歴史の中でもひじょうに重要な地域だったことをお話ししましょう。

現在は、フランスのなかにあるスペインの飛地リビアという場所が中心になっています。11世紀から12世紀のセルダーニャ伯というのは、写真9のような領地をもっていました。セルダーニャ伯というのはイコールバルセロナ辺境伯のことで、バルセロナからフランスのペルピニャンのあたりまで、所有地だったのです。この地は、アフリカのほうからイスラム教徒がやってきて、どんどん自分たちの領土を広げようとして、押し寄せてきます。バルセロナも何度か陥落しました。その時に、逃げ込んだ先がセルダーニャ地方で

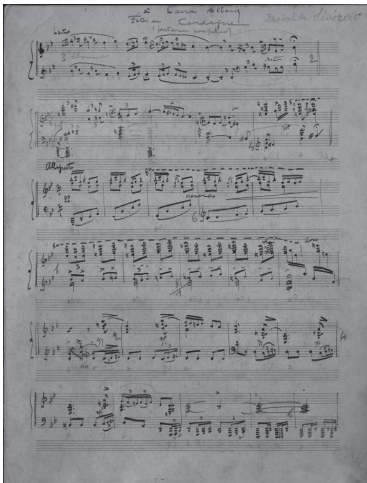


写真8 《セルダーニャ》より〈祭り〉の自筆譜

写真9 1030年ころのバルセロナ辺境伯領

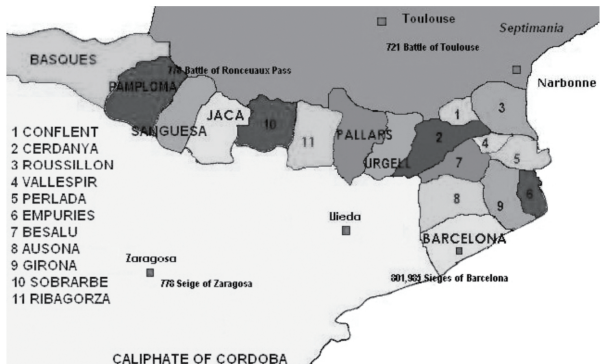


写真10 サン・マルタン修道院



した。そのためセルダーニュ地方というのは、キリスト教徒にとっては、最後の砦みたいなところでした。というのも、非常に山が険しくてイスラム教徒が入ってこられないからです。

旧セルダーニュ伯領の中に、たとえばリポイとかブラードとか入っています。リポイのサンタ・マリア修道院はひじょうに栄えた修道院で、学問的にも目覚ましい発展がありました。この修道院長はセルダーニュ伯の弟だったオリバという人で、その時に非常に栄えたようです。

ここから南に下ったカルドーナには、サン・フェリックスのような丘があり、城塞のような教会サン・ビンセンス教会が立っています。ここは非常に音響効果がよくてガンバ奏者のサヴァールがよく演奏しています。11世紀中頃の建築としては高度な技術が使われていて、これらはアラビアの文化に接触したこの地域の人達が、それを応用して作ったというものです。

写真10はセルダーニュではなく、その端のほうですが、ヴェルネの近くのサン・マルタン修道院です。この、カタルーニャの精神的なシンボルと言われる修道院を建てたのは、セルダーニュ伯のギフレといって、セルダーニュ地方が最も栄えた時期の伯爵です。この修道院は、ギフレが引退して自分の墓所として建てたのでした。こんな険しいところに建っていて標高が1080メートル、だいたい軽井沢と同じくらい。ここはまだピレネーから北のヨーロッパではまだ知られていない技術を使って建設され、しかも容易に建設資材を運べないようなところに、建っているという修道院です。

ブラードにあるサン・ミッシェル修道院は、今ブラード音楽祭のメインの会場に使われているようなところですが、昔カザルスが住んでいました。セレがこの近くにあって、カニゲー山というカタルーニャの富士山のような存在の山を挟んで、ちょうど反対側にあります。

ギフレ「死者の巻物」(1053年)

先ほどのギフレが亡くなった時、その知らせを記した巻物が、ヨーロッパ中に回ったという記録が残っています。このサン・マルタンの地から出発して、ずっとフランスの中を通過して、最終的にはオランダのマーストリヒトやアーヘンまで至って、トリーアを通過して戻ってくる。これが1053年なのですが、ちょうどこの頃から、トリーアの大聖堂とか、マーストリヒトのセルヴァティウス教会とか画期的と言われるような教会建築が作られてきています。ポワチエなんかもそうです。たぶん、リポイとかカニグーとか教会を建てた情報というのが、伝播して行っている。それがセルダーニュの地方から発信している、というのが特徴です。

セルダーニュ伯ゆかりの修道院というのが、先ほどのカニグーのサン・マルタン修道院、リポイ、キュクサ、どれも建築史上の重要作で、このあとゴシックにいたるまで、教会建築に大きな影響を与えています。

アストロラーベ

アストロラーベというものがあまして、これはギリシャで作られました。いろいろな使い方あるのですが、方位を知るため、あるいは時間を知るため、などに使う道具でした。

このアストロラーベを、ギリシャ人の次に使うようになったのがアラビア人です。アラビア人はメッカに向かってお祈りする日課がありますので、その方向を調べ決定するのにこれを使っていました。



写真11 アストロラーベ

やがてアストロラーベはアフリカ経由でヨーロッパに伝わり、記録としては、950年頃にリポイで、使用方法の文献というものがアラビア語からラテン語に翻訳されています。

オーリヤックのゲルベルトスという人がいました。この時代では一番の学者で、最後にローマ教皇になった人です。リポイのすぐ近くにビックという町があって、彼はここの司教のもとに留学しています。このときにアストロラーベを知って、勉強して持ち帰ったのです。ついでにアラビア数字もゲルベルトスがここで勉強して持ち帰ったものです。

ゲルベルトスは次にランスの大司教になりました。この地で、フルーリイ（現サン・ブノワ・シュール・ロワール）の大きな修道院の修道士にアストロラーベを教えています。その修道士のひとり、アッポがやがてこの地の修道院長になった頃に、ドイツのアイフェルにあるプリュム修道院からベルノという人が、フルーリイに留学してきて、アストロラーベの使い方を勉強します。

950 頃	リポイでアストロラーベの使用法がアラビア語からラテン語に翻訳される。
967-969	オーリヤックのゲルベルトゥスがピック司教アットーの下で学ぶ。ゲルベルトゥスを通じてフルーリのアッポがアストロラーベを知る。また、このときにゲルベルトゥスによりアラビア数字がヨーロッパにもたらされた。
994	プリュム修道院のベルノがフルーリでアストロラーベを知る。
1008	ベルノ、皇帝ハインリヒ 2 世によりライヒェナウ修道院長に任命、プリュムから移る。 "Computes Augiensis" を著し、天体観測による復活祭の決定について述べる。
1013	ヘルマヌス・コントラクトゥス、修道院付属学校に入る。
1027	修道院改築開始
1045 頃	ヘルマヌス、Mensura astrolabii を著述。
1048	皇帝ハインリヒ 3 世臨席のもと、改築完了した修道院が献堂された。
1050 頃	レーゲンスブルクのザンクト・エンメラム修道院でヴィルヘルムにより「アストロラビウム」が造られる。

● アストロラーベ関連史

ベルノは皇帝ハインリヒ 2 世の命令によって、ライヒェナウの修道院長になり、この地の修道者たちに使い方を教えたり、自分で簡単な使い方の本を書いたりしています。

ライヒェナウ修道院には、ヘルマヌス・コントラクトゥスという人がいます。今もカトリック教会で歌われている《サルヴェ・レジーナ》の詩と音楽を作った人です。飛び抜けた大天才だったのですが、下半身が不自由で修道院からほとんど出られずに亡くなりました。この人がアストロラーベについて調べて、今までアラビアでも知られていなかった使い方をいろいろ研究して、本に書き残しました。自分のいるライヒェナウ島の緯度を測っているのですが、現在の人工衛星の計測と一致するくらいの精度でした。

アストロラーベを修道院が一生懸命見て、調べていたのは、暦に関わっているからです。修道院では復活祭の日取りを決定することが重要でした。また農業をやっている人も復活祭から何日目に種を蒔くとか、といった考え方で動いていました。しかし復活祭は「移動祝日」で、毎年、満月を基準に決めていくので、精密な天体観測が必要とされていました。アストロラーベがヨーロッパに来るまでは、観測を元に決めることができずに、悪く言うと適当に暦が決まっていた、という状態でした。

それがセルダーニャ地方からもたらされた一連の動きの中で、やがてヨーロッパ中に広まっていきます。今日使っている「時間」という概念が広まり、「今、何時何分」といったことが言えるようになってきました。

この地域は、今でこそ田舎なんですけれども、ヨーロッパでも重要な地域だった時代だったのです。

サン＝マルタンの画期的なところというのは、石造りで天井を全部覆った、ヨーロッパ最初の修道院であることです。それまでは木材で天井を作っていたのですが、火事で燃えてしまいますし、神の家としてはふさわしくない、なんとか石造りにしたい、ということで、やはりイスラムの技術を使って作られました。これが先ほどのアストラーベのような



写真12 荒廃したサン・マルタン修道院



写真13 現在のサン・マルタン修道院内部

ルートを通して、ヨーロッパ中に広まっていきます。300年後には普通のゴシックの教会は天井は石造りになっています。

サン・マルタン修道院は荒れてしまって、20世紀はじめに廃墟同然になっています。これを復興したのはベルピニャンの司教だったカルサラード・デュ・ボン（写真14）という人だったのですが、調べてみると、なんと、セヴラックのおじさんなのです。すごいつながりだなあ、と。



写真14 カルサラード・デュ・ボン

写真12が廃墟だったときの模様。いまは写真13のように復興しています。

1916年8月にセヴラックもブランシュ・セルヴァと共に、麓の町で慈善コンサートをやるというときにこの修道院を訪れています。麓のヴルネ・レ・バンというところから歩いて1時間半くらいかかります。500メートルくらい登るのですけれども、今ならジープがありますが、セヴラックは歩いて登って、おじさんの修道院に行っています。

（構成：亀田正俊）

セルダーニュ関係年表

西暦	事項
400頃	マクシムスがバルセロナに宮廷をおく
480	西ゴート王国
468	西ローマ帝国滅亡
710	イスラムの偵察隊がイベリア半島に上陸
711	西ゴート王国滅亡
717	イスラムによるバルセロナ征服
732	トゥール・ポアチエの戦い、イスラムはピレネー以南に撤退
778	シャルルマーニュ、ピレネーを越えて進駐（ロランの歌）
789	イスラム支配下のジローナの住民がシャルルマーニュに町を明け渡す
801	バルセロナ辺境伯を設置、辺境伯はセルダーニュ伯を兼ねる イスラムに追われ、セルダーニュ地方が最後の砦となる
870	ギフレ（多毛伯、「カタルーニャの建国者」、在位870-897）、セルダーニュ伯となる バルセロナ辺境伯878-
880	ギフレ、リポイにサンタ・マリア修道院を設立
897	ギフレの末子ミロンがセルダーニュ伯として独立する（在位897-927）
927	セニフレードがセルダーニュ伯となる
950頃	リポイのサンタ・マリア修道院でアストロラーベの文献がアラビア語からラテン語に翻訳
957	セニフレード、ブラード近郊キュクサにサン・ミッシェル修道院を設立（現ブラード音楽祭主会場）
967	オーリヤックのゲルベルトゥス（後の教皇シルベステル2世）、ビック司教座学校に留学 ゲルベルトゥスはフルーリ修道院のアッポにアストロラーベを伝授 ゲルベルトゥスによりアラビア数字が初めてヨーロッパにもたらされた
973	コルドバのカリフ、オットー大帝に使節を送る
985	アル＝マンスールによるバルセロナ略奪「バルセロナは死んだ」
988	ギフレ2世（970-1050）、セルダーニュ伯となる
994	ブリュム修道院（ドイツ）のベルノ、フルーリでアストロラーベを知る
1008	ギフレ2世の弟オリバ、サン・ミッシェル修道院とリポイ修道院長になる（-1046）。 皇帝ハインリヒ2世、ベルノをライヒェナウ島の帝国修道院長に任命。 ベルノはアストロラーベを使った復活祭の決定法 <i>Computus Augiensis</i> を著述
1009	ギフレ2世、夫婦の隠遁と墓所としてカニグー山麓にサン・マルタン修道院を設立
1014	サン・マルタン修道院聖堂東側部分完成、西半分は1029年
1045	ライヒェナウ修道院、ベルノの弟子ヘルマヌス・コントラクトゥス <i>Mensura Astrolabii</i> 著述
1050頃	ヘルマヌスがアストロラーベを伝授した人として、 ヴィルヘルム（レーゲンスブルク、ザンクト・エンメラム修道院） ベンノー（オスナブリュック、シュバイアー大聖堂設計主任） ベルソルト（コンスタンツ司教）
1027	オリバ、紛争の絶えない諸侯に「神の休戦」を提案、ヨーロッパ中に広がる
1080頃	ラングドック地方全体がバルセロナ伯の支配下に入る
1090頃	文書に初めて「カタルーニャ」という語が記録される。エル・シッドの活躍
1118	ベルナルトの死でセルダーニュ伯断絶、バルセロナ伯領に組み込まれる ペトルス・アベラルドゥス（アベラル）、エロイズとの間の子に「アストロラブ」と名付ける この頃クリュニー会反映、巡礼街道に多くの施設や教会が建てられる クリュニー修道院長ピエールはトレドにアラビア文献の翻訳センターを開設。多くの学者がピレネーを越えてトレドでアラビア経由の学問を研究する
1258	コルベイク条約、バルセロナ伯はカタルーニャへの介入を放棄する代わりにフランスはカタルーニャ諸侯の宗主権を放棄
1659	ピレネー条約によりスペインとフランスに分割
1910	セヴラック、セレに住む
1939	パウ・カザルス、ブラードに住む

〈連載〉 **セヴラック随想** (3)

濱田滋郎

前回も記したとおり、セヴラックが最も本領を発揮した代表作はと言えば、まず、ピアノ用組曲の形で書かれた《セルダーニャ》を挙げるべきだと思う。彼の円熟期にあたる1908年から11年までに書かれた作品だが、この期間中、1910年に、彼はスペインとの国境近く、そして地中海からもさして遠くはない町のセレに転居している。《セルダーニャ》とは、セヴラックの「終の棲家」ともなったこのセレの地を含む土地の名である。スペイン、カタルーニャ（カタロニア）地方の北部から、南西フランスのルション地方までを包含する伝統的・習慣的な地方名で、行政区分上の地名ではない。セルダーニャの住民は（たとえフランス領の住民でも）カタルーニャ語を日常に話し、風俗習慣や気質の点でもスペイン領内のカタルーニャ人たちと共通している。セヴラックが、フランス領内に住みながら、この曲のタイトルをフランス語の「セルダーニャ Cerdagne」とはせずスペイン語の「セルダーニャ Cerdaña」としたのか——その決定的な理由を私は知らないが、おそらくそのようにスペイン語で言ったほうが、この地方のいかにも南国的な雰囲気、よりふさわしく、端的に告げると考えたからではなからうか。〔ちなみに、このタイトルを「カタルーニャ語」とする説もあるが、カタルーニャ語の綴りならば〈Cerdanya〉となるはず。〈cerdàña〉としたセヴラックは、はっきりスペイン語（標準スペイン語／カスティーリャ語）を用いたのである〕。

何はともあれ、組曲《セルダーニャ》を形づくる5つの作品を通して描かれたものは、この土地の風光、そしてそこに住む人びとの暮らしかたのあいだから浮かび上がる生活感情といったものである。ちなみにセヴラックは、同じ時期に書き上げた作品《日向で水浴びをする女たち》も当初この組曲に収めようかと考えたが、思い直して独立させた。そのあとに残ったのは〈二輪馬車〉〈祭り〉〈村のヴァイオリン弾きと落穂拾いの女たち〉そして〈ラバ曳きたちの帰り路〉だったが、これを試奏したセヴラックの親しい友人、卓抜なピアニストのブランシュ・セルヴァ（1885-1942）が、作曲者にひとつの提案をした。すなわち、通して弾いてみたとき、最後の曲とそのひとつ前の曲とのあいだに、何かもっと落ち着いたテンポの作品をさし挿んだほうが、全体が映えるだろう、というのである。セヴラックは“親愛なるブランシュ”からのこの提案を「もっともなこと」と受け入れ、「第4曲」として残ることになった非常に美しく奥深い作品、〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ曳きたち〉を新たに書き足した。この曲が言わば全体にとっての「重石」の役割を果たすと同時に、趣を格段に深めていることは疑いない。

《セルダーニャ》全曲の楽譜は、音楽之友社よりの日本版が、館野泉・久保春代の編集、

館野泉の解説により 2004 年に刊行され、11 年に版を重ねている。読者もおそらくそれを持っておられると思うので私からは付け加えるべきこともないのだが、念のため、各曲について記してみたい。

第 1 曲は〈EN TARTANE〉、「二輪馬車で」と訳される。タルターヌ（仏）、タルターナ（カタルーニャ）とはこの地方の伝統的な二輪馬車のことで、馬カラバに引かせる。人がこれに乗って、セルダーニャの地へ到着したところから、曲が始まるわけである。曲の冒頭「自由な朗吟のように librement récité」と注釈された、広い音域にわたりメリスマ（細かい節回し）に満ちた歌の旋律が奏されるが、これはおそらく、土地の農民たちが野良に出たとき、大自然に向かって歌う古くからの節の模倣であろう。じつに風情の良い「土地の呼び声」で、ピアニストにとっては、セヴラックをいかに魂込めて弾けるかの、パロメーターにもなろうというもの。つづいては民謡のように素朴な主題旋律が 8 分の 6 拍子の軽快なリズムに乗りながら歌われて行く。やがて、拍子が 4 分の 3 に変わり、〈ES PERANZA（希望）〉と書き込まれたところで、レントのテンポで歌われる、なんとも言われぬ郷愁を孕んだ^{ほら}旋律は、組曲《セルダーニャ》全体のテーマとも呼ぶべき、大切な調べである。この第 1 曲が、イーヴ・ナットに献呈されていることは興味深い。ナットと言えば、20 世紀前半から中葉にかけてアルフレッド・コルトーと並び称されさえした偉大なピアニストで、とりわけ（こんにち CD にも復刻されている）ベートーヴェンやシューマンの演奏により定評があった。ナットは 1890 年の生まれでセヴラックより 18 歳年下だが、どのような接点が両者間にあったのだろうか。

第 2 曲〈祭り〉は「ピュイセルダの思い出」と副題されている。Puigcerda（この綴りだと、カタルーニャ語では「プッチャルダ」と発音されるはずである）はスペインとの国境近くにある小さな町とのことだが、ここでの郷土色にあふれる祭りの情景が、この曲には想起されている。曲を支配する軽妙な 2 拍子の足どりは、カタルーニャを代表する舞曲、サルダーナのそれと見てよさそうだ。やがて、曲が 4 ページめに入ったところで、第 1 曲中〈ES PERANZA〉と記された大切なテーマ旋律が現れるが、ここには〈CHARMANTE RENCONTRE（魅惑的な出会い）〉の書き込みがある。一体誰との出会いなのかはこの曲の献呈辞から明らかになる。それは、イサーク・アルベニスの末娘、1890 年生まれなので《セルダーニャ》の作曲当時 20 歳になるかならぬかだったラウラ・アルベニスに違いない。サルダーナの踊りの輪に加わってか、あるいはそれを眺めてか、若く美しいラウラがそこに居たのだ。その後、楽譜の 7 ページの中ほどになると、曲調が突然 8 分の 3 拍子に変わり、いかにもスペイン風な律動を伴うファンダンゴ舞曲となるが、そこには「ここで、かの親愛なるアルベニスに出会う」と記されている。それが実際にピュイセルダであったか否かは知らず、セヴラックはきっと、カタルーニャカルシオンか、どこかセルダーニャの町で、アルベニス父娘と邂逅した思い出を持っていたのだろう。

ちなみに、カタルーニャ地方の出身者で、作曲家としての円熟期をほとんどフランスに過ごしたアルベニス、ひところヴァンサン・ダンディが率いるスコラ・カントルムでピアノを教えたことがあり、セヴラックはその生徒の一人であった。どちらも「南の人」同士で気質的にも惹かれ合うところのあったアルベニスとセヴラックは、やがて師弟関係以上に深い友情で結ばれ合うようになった。やはりカタルーニャの血を持ち、アルベニスの大作《イベリア》全4巻の初演者になると同時に、セヴラックともひとつのきずなで結ばれていた存在、ピアニストのブランシュ・セルヴェは、1930年に史上初の貴重な『セヴラック伝』（1930）を著わしたことから忘れられぬ人だが、この評伝の中には、ルネ・ド・カステラ（セヴラックとはスコラと同級生だった作曲家、後に楽譜出版も手がけた）から伝え聞いたこととして、次のようなエピソードが綴られている——「アルベニスが、持病であるブライト氏病（腎臓病の一種で、当時は治療不可能とされた）の療養のため、南仏のニースに、ある館を借りて住んでいた時のこと。セヴラックはアルベニスのもとへ予告なしに訪れて驚かせてやろうと考えた。ゴムの合羽に身を包み、大きな青いつば広帽子を目深にかぶって、彼は友の宿泊先をたずね当てると、扉をノックした。出てきたのはアルベニス本人。そこでデオダは、わざと顔を隠したまま、声色を変えてこう言った……“わたしゃ、かねもなく、泊まるあてもない、しがたない音楽家でやんす”と。しかしアルベニスはそれが誰であるかを見破り、こう叫んだ……“この豚野郎、ごろつき、泥棒。いやさ、大事な古友達^{ふる}、さあ、入っておくれ。だが、この牢屋に入ったら、もうあんたは逃げられんよ、きつい牢番がここに居るからね”と。部屋にはピアノとオルガン（ハルモニウムであろう）があり、やがてふたりは語らいののち、お互いに即興演奏を始めた。アルベニスはオルガンに、セヴラックはピアノに向かって。セヴラックが弾いていると、いつの間にかアルベニスはオルガンから離れて彼の背後に居り、目に涙を浮かべながら彼を抱き締めたという。

話は先のラウラに戻るが、3人の娘がいた中でも最も“父さん子”であったらしい彼女は、娘の頃からとくに絵ごころがあり、父の没後、挿絵画家として活動した。幾冊か、1920～30年頃にスペインで出版された文芸書（詩集、戯曲など）で、ラウラ・アルベニス筆の挿絵が載ったものを私は見ている。そして、それら、“古き良き時代”の匂いがするラウラ筆のイラストを目にしたとき、私には思い当たることがあった。かねがね私の持っている《イベリア》第1巻初版（1907年）の口絵が、それら挿絵と、どう見ても同じ人の筆致によるものと思えたのである。楽譜の口絵には署名がないが、これは明らかに、当時まだ17歳だったラウラが、父の作品のために描いたものと見て間違いはない。いかにもスペイン風な祭り着を見にまとった一人の女性が、噴水に凭れて座っているその口絵を、話の種に、ここに載せて見て頂くとしよう（図1）。同時に父と一緒に写っているラウラ本人の写真をも（図2）。〈祭り〉の中の“魅惑的なめぐりあい”のイメージを具体的なものにするために、ラウラの姿かたちを知ることは役立つであろうから。なお、セヴラックが、アルベニスの遺作のひとつ〈ナバーラ〉を補筆完成したのも、ラウラからの依頼があった故だという。



図1 アルベニス《イベリア》初版にある挿絵



図2 イサーク・アルベニスと娘ウラ

第3曲〈村のヴァイオリン弾きと落穂拾いの女たち〉は、4分の4拍子の落ち着いたリズムを持ち、「フォンロムウ（地名）への巡礼の思い出」との注釈が添えてある。山もあれば海もある、大らかな自然と、そこに生きる名もない、しかし健やかな、愛すべき人びとへの讃歌。献呈は「友人カルロス・ド・カステラのために」とあるが、これは先に名の出たルネ・ド・カステラの兄にあたる人である。原題は〈MÉNÉTRIERS ET GLANEUSES〉で、この「メネトリエ」は、古くから一般的に“楽師”“辻音楽師”をさして使われる言葉である。したがって楽器は必ずしも特定しなくてよいのだが、「村の“ヴァイオリン弾き”」という訳が定着しているのは、おそらく誤ったことではない。村人の民俗舞踊を伴奏するヴァイオリン弾きの存在は、フランス国内の各地から知られているのだし、曲の中にも、いかにも素朴なヴァイオリンによって奏でられるかのような旋律が顔を出すのだから。

さて、このあたりで今回予定の紙数は尽きてします。以下、《セルダーニャ》にまつわるくさぐさは、次の号に譲ることにしたい。

リレー連載

セヴラックと私

多田恭子

2008年の暮れ、私は長いことかかえていた病気を治療するため仕事を休んで入院していました。クリスマスに手術を受け、2009年の初日の出は病室の窓から見ました。退院後1か月ほど休職し、自宅で休養していました。気持ちの晴れない年明けでした。

子供の頃から音楽が大好きで、朝はNHKFMを流しているのですが、慌ただしい朝のこと、いつもは聴き流していたのです。仕事を休んでいる間久しぶりにゆっくりした朝を過ごすようになっていたせいか、それともセヴラックの音楽があまりにステキだったからか、耳についたのです。目の前がパッと明るくなったようでした。

「えっ何？ 今の曲、誰の？ 何ていうの？」

すぐにパソコンを開けて、番組のホームページを調べました。そんなことをしたのは初めてでした。後にも先にもあの1回だけ。

それはセヴラックの《休暇の日々から》の〈シューマンへの祈り〉他2曲でした。「なんてステキな曲なんだろう。もう一度ちゃんと聴きたい」。そのままアマゾンでCD「ひまわりの海」と音楽之友社の『セヴラック ピアノ作品集』の楽譜を注文しました。私とセヴラックとの出会いでした。

ひと目惚れならぬひと聴き惚れ？ CDが届いてから数日の間は朝から夜までかなりの音量でかけっぱなしでした。解説書を何度も読み返し、ジャケットの写真に見とれ、それぞれの曲の風景や物語を勝手に想像するのはとても楽しい時間でした。そして舘野先生の演奏と文章にも魅了され、エッセイ『ひまわりの海』を読み、先生のCDを聴きあさりました。「生の演奏を聴いてみたい!」。2009年6月5日、中野ZEROホールでのラヴェルのコンチェルトでそれは実現しました。

その日は冷たい雨が降っていましたが、私はひまわりのブーケを持って楽屋を訪ねました。お会いできるとは思っておらず、「ああ、ここにもセヴラック愛好者がいるのだな。」とちらっとでも思っただければいいと思っただけのことでした。ところが、先生は気持ちよく会って下さり、「あなたもセヴラックがお好きなのですね。では来週セヴラック協会の集まりがありますから、是非いらっしやい」と素人の私を丁寧に誘って下さいました。

それ以来、セヴラックを通じていろいろな方と出会い、いろいろな経験をさせて頂いています。会員の房野さんのご実家と我家が近く、彼女が石田一郎さんにピアノを習っていたこと、彼女と私の息子が卒業した小学校の校歌を石田さんが作曲していたこと、知らずに行事のたびに歌っていたこと。房野さんと一緒に舘野先生を石田さんのお宅があった場所へご案内したこと。また、例会で知り合った本宮さんにお誘い頂いて、セヴラックの

歌曲の重唱をさせて頂いたこと。伴奏も会員の豊永さん。久しぶりに譜読み、歌詞の意味と発音の勉強、発声の先生に通い、家事も仕事もしながらも、すべてが充実していて、音楽ってなんて素敵なんだろうと心から思ったのです。

そして味気ない、単調だと思っていた日常が、実はカラフルで輝いているということに気付かせてくれたのもセヴラックの音楽でした。セヴラックもそんなことが実現したかったのかしらと思いながら、今も《大地の歌》を聴きながら書いています。



第17回例会の報告

鎌田和夫

例会の報告の前に、昨年3・11東日本大震災の瓦礫の中から見出された桜の枝の話をさせていただきます。

今春、六本木の「禅フォト・サロン」において福島大学准教授の渡邊晃一先生（美術家）が個展を開きました。こじんまりした会場の中央の天井は吹き抜けになっていて、光りがいっぱいに射し込み、昼間は曇天であっても照明を必要としません。省エネを心得たサロンです。

吹き抜けの天井からは桜の枝が吊るされてありました。その真下の床には大きな鏡が置かれ、3メートルほどの長さの桜の枝が映っています。渡邊先生が福島の瓦礫から見つけ出した桜とのことでした。その枝は石膏で白く塗られ、天井から吊るされ揺らいている姿は白骨化した大きな鳥の亡骸のようにも見え、大海に流されてしまった幼子の白骨の標本のようにも見え、淋しげにたゆたっていました。さらに、桜の枝には夜光塗料も塗られ、夜はほおっと青白く光りを放ちます。サロンの壁面には崩れゆく灰色の壁が設えられ、左右の壁には棺桶のような箱が均等に立ち、なんと薄気味悪い科学実験室に迷い込んでしまったおもいかられてしまいました。また、否応なしに3・11の大震災の光景と重なり、心は空しく、心の重く、頭は真っ白になっていくばかりでした。

それから数日後、サロンから「桜の花が咲いたから、見に来ませんか」という連絡があったんです。もちろん、馳せ参じました。確かに白く塗られた桜の枝から何輪となく白い花が咲き誇り、多くの蕾がふくらんでいるではありませんか。枯れ枝から花が咲くというのは花咲か爺さんの話でしか知りませんでした。今、目の前に信じられない奇跡が起こっていたのです。その生命力には驚くばかりでしたから、なんとか言葉にしたいと願っていましたら「死んでしまったはずなのに」という詩が生まれました。

後期の例会は変則な中で行われました。最高気温26度。暖かいというよりも暑いほどの晩秋の10月23日（日）となり、青空には高く綿雲が浮かんでいました。

その日、館野先生は地方公演から直接の会場入りという強行スケジュールでした。開始時間も午後6時と異例づくめ。そんな慌ただしさの中ではじまりましたから、恒例となりましたセヴラックの歌劇《風車の心》の幕開けに、ほっとした心地になったものでした。いつものように懇切丁寧に判りやすい末吉先生の解説に、情景が鮮やかに蘇り、セヴラックの例会がはじまりました。

18世紀中葉のサン＝フェリックス・ロラゲの晩秋の模様が目の前に広がりはじめ、この時期に相応しい場面ではないかとおもい直したものです。森朱美さんと鎌田直純さんとの心に沁みる歌声に、人の性の悲しい模様が影絵になって浮かび上がって来るようでした。ラングドック地方の豊かな田園の中にゆっくり身を寄せることが出来たのです。

死んでしまった

はずなのに

鎌田和夫

死んでしまった
はずなのに

アナタは白く

夢の中

春の光りに

包まれて

白くふくらみ

背伸びした

死んでしまった

はずなのに

アナタは白く

よみがえり

かなたの空に

よみがえり

白き眠りを

遊んでた

死んでしまった

はずなのに

白き目覚めの

心地よく

白く息づき

ほほえみの

荒れ果てた地を

祈ってた

死んでしまった

はずなのに

白き人影

浮遊して

小さな天使

ナミダぐみ

白くただよい

困ってた

死んでしまった

はずなのに

アナタは淡き

眠りから

さまよい流れ

戸惑いの

うれし涙を

浮かべてた

死んでしまった

はずなのに

心の底を

見つめられ

白く恥じらい

なぐさめの

白きため息

吐いていた

死んでしまった

はずなのに

白く涙し

かなしみの

白くさみしく

薄闇の

虚空を眺め

泣いていた

死んでしまった

はずなのに

ほころぶ心

よみがえり

白き涙の

よみがえり

アナタは目覚め

ひとりいた

どこまでも
サクらは白く
つもりゆく

死んでしまった
はずだから

なにゆえに
目覚めたか
かなしみの
サクラ花

なにゆえに
たましいを
灯すのか
サクラ花

なにゆえに
心地よく
泣きじゃくる
サクラ花

なにゆえに
たましいは
散り舞うか
サクラ花

今、まさに、その小高い丘の上では村人たちが三々五々集まり、待ちに待った収穫祭を祝うところ。そんな華やかな賑わいの場面からはじまる第1幕4場。村の家々から丘へ向う村人たちの晴れやかな喜びいっぱいの顔々々……。

舞台の下手が村で、上手が風車。たちまち想像が膨らんでしまいました。村の象徴でもあるかのように、たおやかで豊かな風車の姿を見ているだけで心が慰められる。そのためかどうか風車を教会に見立て、十字を切る人も。中でも敬虔な信者は風車小屋で働く丸太みたいな腕をした爺さんに違いない。休まず粉を挽く風車の面倒を見て来た爺さんは「互いに歳をとっちゃって、すっかりガタが来ちゃったな」とひとりごちしながら、まだまだ元気に粉を袋につめている。

その風車小屋はマリーがジャックと再会を果たす場所。久しぶりに見かけたジャックに村人たちは温かな挨拶の声をかけている。歓迎されているのです。ロゼで「乾杯!」。笑い声と踊りと楽の音が絶えません。

やがて空が真っ赤に染まりはじめる静かな夕暮れのひととき。丘の上は時が静止したように長い沈黙が続き、すべての音が遮断されたような静寂が心地よい。しかし、二人には別れる時が迫っていました。

続いて森さんと末吉先生とによるセヴラックの歌曲《私の可愛いお人形さん》。幼子をゆるやかに抱え、優しくあやす母親の温かな包容力を感じ、女性の生きる逞しさを覚え、聴き惚れてしまったものです。

休憩後は館野先生と平原さんとの三手連弾でエスカンデ《音の描写》。それぞれに画家の名前が掲げられた曲ですが「絵に基づいて作曲したわけではなく、曲を作っていくうちに、あっ、あの絵だ、となってタイトルが生まれたのです」と館野先生。連弾に耳を澄ましていましたら、詩がイメージされました。題して「語る画家たち」。

フィナーレの曲目は決まっていなかったのですが、その日は吉松隆「タピオラ幻景」となりました。フィンランドの深奥の大自然の森から神聖な心が湧いて来るようでした。「森の神」という詩になりました。

語る画家たち

鎌田和夫

(その1)

爬虫類・エッシャー

色を変え
清流は
這いまわり
威勢よく
転がる目
迷いなく
移りゆき
上流へ
天翔る
さかのぼり
鳥となり
落下する
空の海
群れをなし
浮遊する
日常の
鰯雲
その時を
知らぬまま
透明に
流れ逝く
よどみなく
加速する
側溝の

(その2)

夢・ルソ

真夜中の
樹木の森を
さすらえば
葉蔭に光る
好奇の目
夜露に濡れて
迫り来る
きらめく滴
月光に
涙涸れ逝く
静寂を
求める夜の
青白く
星屑の砂

(その3)

砂に埋もれた犬・ゴヤ

騒がしく
流れゆく砂
血の鼓動
哀しみに染まり
終わりなく
心のナミダ
崩れゆき
壊れ逝くまま
乾く砂
あてどなき
苦しみの旅
開いの
空しき砂に
亡骸の
埋もれる墓標
垂れ下がり
砂漠を歩む
犬の影
首縊り
砂に刻まれ
魂の
沈み逝く

(その4)

空の青・カンディンスキー

つむぎゆく

点と線

不揃いに

並べられ

一つずつ

動き出し

また一つ

ぶつかって

微笑みの

舞踏会

やわらかに

直線の

なめらかに

曲線の

姿なく

縦横を

闊歩する

青い騎士

はかなさを

空の蒼

むなしさが

いっぱい

花の咲き

白のまま

森の神

鎌田和夫

雲間から

天柱の

放射して

光彩の

透き通り

舞う天使

糸白く

森の中

照らしてた

朝露に

濡れながら

森の中

冷涼の

風を呼び

心地よく

通り過ぎ

気まぐれに

踊ってた

静かなる

湖に

森の神

恵みの樹

森の中

湧く水の

あふれゆき

流れゆき

喜びの

輝きの

満ちあふれ

光ってた

清らかな

幸せの

森の中

しずくなる

愛の溶け

どこまでも

流れゆく

光る水

凍えてた

静かなる

黄昏に

森の中

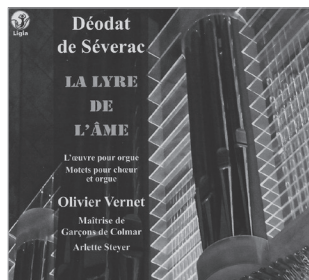
NEWS

● 「セヴラック：オルガン作品全集」発売

セヴラックのオルガン作品を網羅した CD が Harmonia Mundi 傘下の Ligia というレーベルから発売されました。日本国内では 6 月下旬に発売予定。会員の宮山幸久さん絶賛の内容です。

セヴラック：オルガン作品全集

- ①組曲ホ短調 (全 4 曲)
- ②オルガンのためのヴェルセ (全 5 曲)
- ③スコラ小組曲 (全 5 曲)
- ④四重奏の前奏曲
- ⑤英雄的悲歌
- ⑥タントウム・エルゴ
- ⑦7つのカンティーク
- ⑧サルヴェ・レジーナ
- ⑨アヴェ・ヴェルム
- ⑩おお、聖なる晩餐よ



オリヴィエ・ヴェルネ (オルガン)、アルレット・ステイエール (指) コルマル少年聖歌隊⑥ - ⑩

録音: 2011 年 9 月 / ドミニク・トマ大聖堂 (モナコ) ① - ⑤、サン・ローラン教会 (ソーシェイム) ⑥ - ⑩

LIDI 0104244 D D D 69 分 32 秒 6 月下旬入荷予定。

セヴラック通信 第 12 号 2012 前期 日本セヴラック協会 会報

2012 年 6 月 10 日発行

発行: 日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局: 松田純子◎〒 247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先: 亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本: フェデックス・キンコーズ・ジャパン

